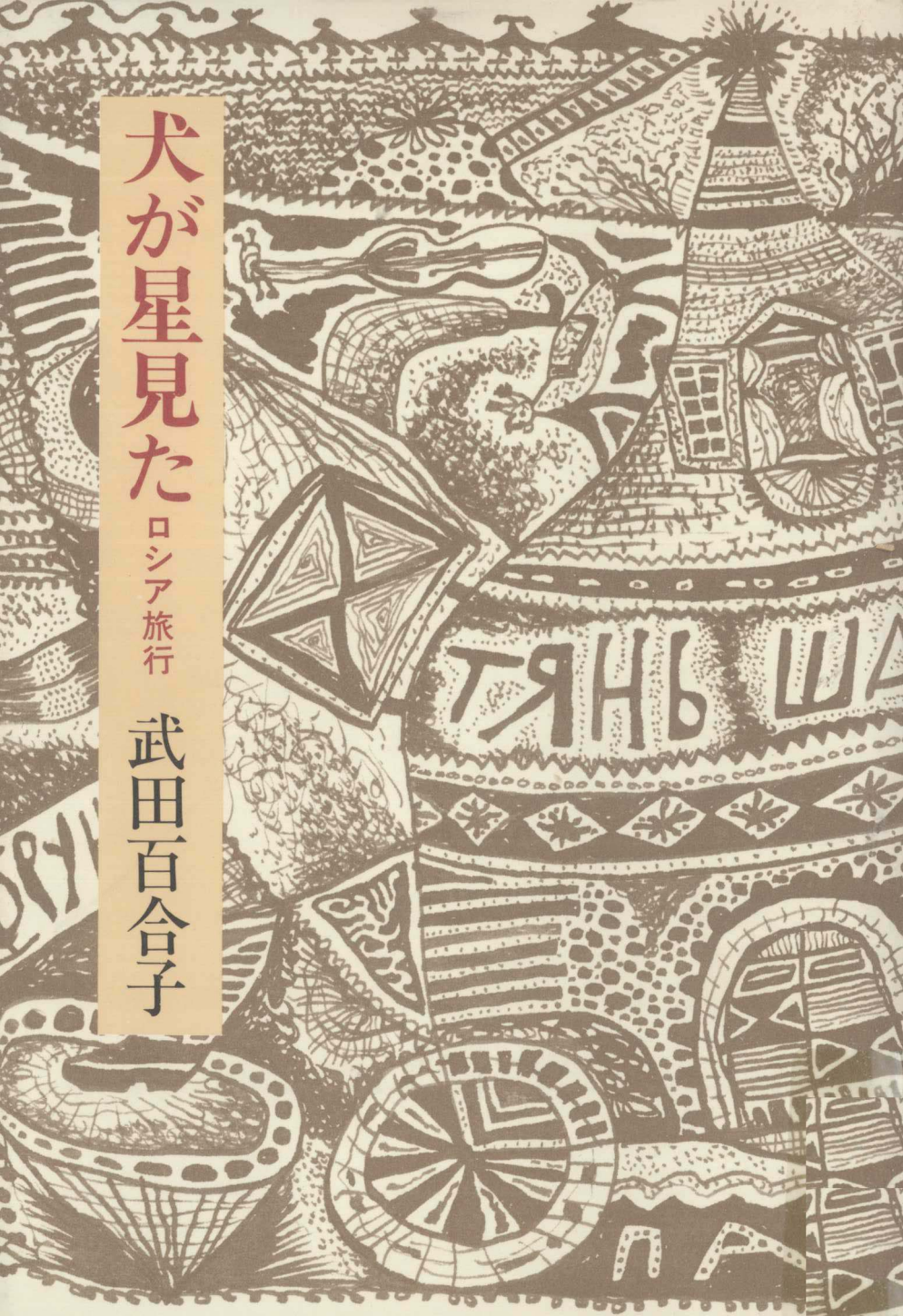


犬が星見た

ロシア旅行

武田百合子



武田百合子

犬が星見た

ロシア旅行



中央公論社

犬が星見た

——ロシア旅行——

定価 一二〇〇円

昭和五十四年二月二十五日初版発行
昭和五十四年三月十五日再版発行

著者 武田百合子

発行者 高梨 茂

印刷 三陽社

製本 矢嶋製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二―八―七

電話 五六一―五九二一

振替 東京二―三四

©一九七九 検印廃止

犬が星見た

——ロシア旅行——

昭和四十四年六月十日 晴

朝七時半、毎日新聞社の高瀬さんが迎えにきて下さる。玄関に入ってきた高瀬さんの喉のところには、ちり紙をちぎって貼りつけてある。三カ所貼りつけてあつて血がにじんでいる。貼りつけてないところにも点々と血がにじみ出てかたまっている。高瀬さんの自宅は遠いので、遅れるといけないから昨夜は本郷の知合に泊ったのだという。今朝あわてて顔と喉を剃って血が出てしまったのだろう。ワイシャツの襟にも血がとんでいる。七時四十五分に出る。横浜大棧橋に九時十五分前に着く。

ハバロフスク号は真白い船だ。大棧橋の左に横づけになっていた。

竹内〔好〕家では八時にここに着いてしまったという。照子さん〔竹内好夫人〕ヒロ子ちゃん〔長女〕ツギ子ちゃん〔次女〕が並んで腰かけている。少し離れたところに竹内さんが腰かけている。花子は今朝六時半に学校へ出かけたので、うちは家族の見送り人なし。

F 旅行社の山口さん（この旅行に付添ってゆく人）と松村さんが着く。

F 旅行社企画の「六九年白夜祭とシルクロードの旅」は、山口さんをいれて十人。竹内さん、

主人、私、山口さんのほかは、関西の人だから、昨夜は横浜のホテルなどに泊って、ここに集まってきた。関西の人と関東の人、山口さんの紹介ではじめて顔合せ。

錢高さん（この人だけは、とびぬけて年よりだということも分った）、坂野さん夫妻、江口さん、島さん（この人たちの年はよく分らない。六十前後位だろうか）、三杉さん（いくつ位か分らないが、関西組の中では一番若い）、女は坂野夫人と私。坂野夫人は六十前後、手足が長く洋服がよく似合う。

山口さんは「旅行団の団長をきめておきたいと思います。旅馴れていらっちゃって年長である坂野さんが団長、関東組から竹内さんが副団長」と言った。これから、ここでしなければならぬ手続について説明があり、旅券を渡される。外国製の時計、貴金屬類、万年筆類を持っていたら申告をしておく白い紙きれを渡される。主人は何にも聞いていないみたいだ。竹内さんと私は一生懸命聞いている。ことに私は選挙の投票にいつでも毎回かしら間違えるので、緊張して聞いている。ずっと前、花子にやった時計をまた返してもらってしてきたので、松村さんに見せると「スイス製ですな」といわれる。松村さんに時計の名前を読んでもらって、間違えないように書き込んだ。旅行に行く人たちだけ揃って、出入国管理事務所（というのだろうと思う）へ行き、旅券にサイン（？）のようなものをしてもらう。また、ぞろぞろと揃って元のところへ戻ってくる。ポーターにトランクを渡す。一個百五十円（これは税関の調べ所で調べが済むと支払った）。今度は税関。ここで見送りの人たちと別れる。うちの見送りの人は、高瀬さんのほかに、中央公論社の近藤さん二人（近藤信行さんともう一人同姓の人）と岡本博さんが増えていた。『海』の連

載小説をはじめ約束をすっぱかして旅に出るのだ。主人は「近藤君にだけは旅行に出るのを知られたくない。わるいからな。俺はいいにくい。ほかの出版社に知ればすぐ近藤君の耳に入るからな。従って、ほかの出版社にも黙っている。出るまぎわまで誰にも出来るだけ黙ってる」と、ひたすら近藤さんのことを気にしていたが、昨夜わかってしまったらしく「本当ですか」と、惘然とした声の電話がかかってきたのだ。今日も近藤さんはふくれっ面をしている。

船の中に入ると、もう一度、サロンで旅券の調べ。これは山口さんが全員に代って行列に並ぶ。私たちは長椅子に腰かけてぼんやりしている。私の隣りに腰かけた江口さんは「竹内さんという方は、怖そうな御方ですな」と、心配そうに私に囁いた。元気がない。関西組は、銭高老人をはじめ、大方は実業家らしい。古くからの知り合い同士で、みんな美術に興味があって、美術をみる外国旅行も時々一緒にしているらしい。三杉さんは美術館の仕事をしていて陶器の研究家なのだそうだ。

甲板に出てみる。岡本さんと高瀬さんが下から見上げている。岡本さんは賑やかにしてくれようと一生懸命だ。テープの束を放ってくれる。だから、それをこっちから投げる。大学の運動部の見送りが応援歌を歌う。照子さんとヒロ子ちゃんとツギ子ちゃんともう一人親戚らしい男の子が並んで見上げている。照子さんは口を手をやって何か飲む真似をし、怖い顔をして手を振って、それを打ち消す真似をしてから笑う。竹内さんと主人に向ってする。

「何のこと？」と竹内さんに訊ねると、「酒を飲むなといってるんだ」と言った。

照子さんは待合所でも主人に言っていた。

「武田さん、パパに酒をあまり飲まさないようにね。頼むわよ」

楽隊が甲板に出てきた。音楽がはじまる。二年位前に流行ったような気がする、聞いたことのあるような音楽。白ワイシャツにネクタイなし。ワイシャツの一番上のボタンを外した質素な楽隊。アコードオン、エレキギター、ドラム。音楽をはじめたのでもう出るのかと思ってまだまだ出ない。三十分以上もこうしている。陽がさんさんと射している。高瀬さんも岡本さんも照子さんたちも、上ばかり向いていて、気持がわるくなるのではないかしら。私たちも笑ったりしている顔がこわばってきて、唇が元へ戻らず、笑い放しのような表情になってきた。そのうちにやっと出る。出ると、あっという間にすると棧橋を離れて、見送りの人たちの表情が見えなくなる。気が楽になった。

室は一一六号、竹内さんは二二四号、離れているらしい。竹内さんは「いいかね。俺の室は二二四号だよ」と主人と私にいい含めた。

ベッドには毛布が一枚ずつ。枕カバーあり。洗面所には小さなシャボン、飲料水の水差し、コップ二つ。シャワーと便所は隣室と共用。隣室の人が入っているときは、使用中のランプがつく仕掛。

しばらくは茶色い海を走る。小さい船、大きい船、黒い船、青い船、赤い筋の入った船、茶色い海を行き交う。

昼飯。

前もって渡されたカードに記されてある席番号の食卓につく。十四番。私たちは坂野夫妻と同

席。竹内さんは少し離れた食卓で、こつちを振り返って見ている。女学生らしい人と同席。

前菜に昆布と魚の油和えのような小鉢一つ。スープ（赤い色をしたスープ）、挽肉（ハンバーグ風）と御飯が、一つの皿に、テニスボールを真二つにした大きさに、まん丸く並んでのっている。きゅうり少々、トマト少々、キャベツが酢とソースで和えてあるのが添えてある。

食卓には水差しと紅茶茶碗が出ている。パンは甘味と酸味があつて、舌ざわりと喉を通るときにごわごわするが野性的な風味だ。おいしい。

主人はビール二本とる（小びん）。百六十円。

食堂を出て階段を上ったり廊下を歩いたりしているうちに、酒場があるのを見つけた。主人は入りたいという。係は太った濃い化粧の大年増が一人。スタンドのまわりには日本の男がずらりと腰かけている。自分でビール二本とコップ二つを持ってきて、隅のテーブルで飲む。五千円札を出しても、小型金庫のようなものをあけて、すぐ釣銭をくれる。

「百合子。面白いかな？ 嬉しいかな？」ビールを飲みながら主人が訊く。

「面白くも嬉しくもまだない。だんだん嬉しくなると思う」と答える。

甲板では西洋人男女が脚を投げ出して日光浴。ビキニに着替えて出てきている女もいる。本を読んでいる人もいる。歩いていると、竹内さんが一人で向うからやってくる。「酒場があるぞ」と主人は得意気に言う。今出てきたばかりの酒場へ戻る。

スタンドには客がいなくなっていた。私たちは大年増の前に腰かけて、竹内さんと主人はコニヤックとウオツカ（モスコスキー、スタルカ）、私はビール一本を飲んだ。

主人がピースを大年増に差出すと「ノー スモーキング」だといって手を振ったが、それでも受け取り、火をつけて二口ほど吸ってから、客の私たちに分らないようにスタンドの陰でもみ消した。いかつい顔をしているが、鳩のようなくぐもり声で、ゆっくりとしたやさしい物腰だ。その色の白いこと。顔、喉、二の腕。

甲板に向ってついている室の窓には、薄いカーテンがかかっている。甲板を往来する人の姿が、この窓にひっきりなしに入っては消えて行く。猫背の大男、太ったおばさん、ピキニの娘、家族連れの中年男、杖をついた脚のわるいおじさん、本を二、三冊抱えている人。

昨日、一昨日、その前から、家を留守にする支度におわれた寝不足で、アクビばかり出る。私は船酔いをするたちなのかしら。何もすることがないので昼寝をする。すぐ深く眠ってしまう。

オルゴールの音のような音楽（シャルメーヌ、シャルメーヌと歌う曲、大分前に日本で流行した曲）が、ちょこっとかかって、それからお客様へのお知らせがはじまる。四時のお茶。出かけて行って、紅茶をカップ一杯、ロールパン一個とバター。また二段ベッドの上によじのぼって眠る。またシャルメーヌのオルゴールが鳴る。五時からサロンで映画会。私は眠りたいので行きたくないが「一緒に行こう。一緒に行こう」と主人が誘う。

「きつと文化映画だよ。タメになる映画だよ。眠いから行きたくない」と言うのと、

「さつき船に乗ったばかりの癖に、もうバカにする。そんなこっちゃいかなぞ。何でもバカにしていけない」とにらむ。

会場はもう暗くなっていて、主人は席を探しながら前の方へ。私は出入口に近い長椅子に腰を

下ろす。五分ほど観たが、つまらないから帰ってきてしまふ。入りきれなかった西洋人家族の幾組かは、開け放された出入口の扉の外の階段に腰かけて、映画を観ていた。遮るもののない海の夕陽が、そこまで射し込んできていて、子供も親も、金髪やまつ毛や顔の産毛をキラキラ光らせて観入っていた。主人は最後まで観ていた。モスクワなどの観光案内みたいなものだったらしい。主人の隣りで観ていたロシア人の子供は日本語が達者で「ダメネエ、コレ。ダメネエ、イヤネエ、タダメテルダケ」と主人に向って言っていたそうである。

いつまでもいつまでも陽が射している。夕食に食堂に入っても、小さな丸窓から一直線に陽が射し込んで、向いの席の坂野夫人の顔のところに、あたっている。坂野夫人は眩しそうに手をかさしたりして、うつ向き加減で食事をつづけている。小さな丸窓から見える海は、いま、丁度、陽が落ちてゆくところ。海も太陽も窓も金一色に輝きつづけている。

夕食

○ソーセージ二本にハムの燻製、野菜のつけ合せ

夜はあっさりしている。

明日の昼食と夕食の献立表と予約注文票がくる。私は主人と同じ番号を書き入れてみたが、もう一度献立表をよく見て考え直して訂正した。ぶどう酒を一本注文して室へ持って帰る。四百八十円。

食堂から出てきたときだ。太陽はみるみる赤黒くなって、海もにわかには黒くなる。甲板に出て、皆、それを見ている。

オルゴール鳴る。八時からダンスパーティー。サロンに人はたくさん入っているが、皆、じいっと腰かけているだけで踊らない。出航のときの楽隊が演奏。社会主義国の楽隊は譜面を一枚ずつめくっては次の演奏をする。即興や燥いだ風にはやらない。プログラム通り真面目に演奏している。どんなダンス曲も国歌を吹奏しているように聞える。楽隊の人たちも、小さな男の子を脚の間に抱えこんで音楽を聴いている中年の男も、二、三人連れで腰かけている中年や老いた女も、頸が太い。西洋人の男や女は頸が小さくても頸は太い。胴体からしっかりと幹のように頸が伸びていて、その上に顔がついている。丈夫な食道だの気管だの血管だのが、ぎっしりとつまっている、たくさん血が上り下りして動悸をうっている大切なところだ——ということがよく判るような頸をしている。東洋人の頸は細くがくがくしている。日本人の顔は主に蟹に似ている。顔の中が米の印になっている、体つきもこわばっている。歩き方は危なっかしい。しかし、西洋人からみれば、私たちはエキゾチックでサイケだろう。

坂野さんが「絵葉書を買ってますよ」と教えてくれた。売店で二枚買う。百四十円。ロシア人がロシアのこけしを買って喜んでいた。

甲板には冷たい風が吹いていて、もう人影はない。風の入らない硝子ばりの甲板の方で、三人、デッキチェアで本を読んでいる。レインコートをひっかけた女が男と手を組んで、一組ずつ、ゆっくりと歩いている。囁き合っている。五十位にみえる、ずんぐりした小柄な、労働者風の身なりの白人の男が、太った奥さん（日本人らしい）と、洗いざらしの赤いシャツを着た小さい男の子を連れて、ゆっくり歩いている。口をきかない。奥さんは質素なプリント木綿のワンピース

の上に、敗戦直後の頃のような古い型の赤いオーバーコートを着ている。男の子は「サプイねえ」と言った。夫婦はそれにも返事しない。

十時半、ねる。

真暗な海に、小さい船が一隻、遠くに浮いている。三つ灯をつけて揺れている。さびしいというのか。いい感じというのか。何とっていいのか。

六月十一日　くもり

六時ごろ、うっすらと眼がさめる。昨日からしているクリーニング屋の機械の音のようなのが、相変らずしている。船に乗っていたのだな、と思う。ベッドが硬いので熟睡した。(私は脊椎をわるくしたことがあるので硬い敷ぶとんでねているから、たまに旅館やよその家で上等なふわふわのふとんにねると眠れない)

「晴れてはいない。霧がかかっている」ずっと前から起き出していた主人が言う。

ノックして竹内さんが入ってくる。

「早起きだね」と言う。

「俺は三時ごろから起きて、酒飲んだりしてるよ。うちにいてもそうだ」

主人はいそいそと、コニヤックとぶどう酒を竹内さんにすすめる。

「百合さんはねていらっしやい。二人で飲んでるから」と竹内さんが言うので、私は二段ベッドの上から、ねたまま二人の話をきいている。

「机の上に銀紙のチーズが出てるでしょ。昨夜ねるとき、とうちゃん夜食用に出しておいたんだけど。三時から起きてたのなら、もう食べちゃったかな」と、教えると、

「あれ、これチーズなのか。キャラメルだとばかり思ってたよ。百合子のやつ、ねる前にキャラメルを食べくさってからに、放り出してねやがったと思って、さっきから手も出さないで酒だけ飲んできた。ソシたな」と言う。

二人は早速、銀紙をむいてチーズをつまみにしている。

「このチーズ、うまいんだよ。なかなか売ってないんだ。俺もこれ持ってこようと思ったんだが、吉祥寺の店になかったんだ。百合さん、どこで買ったの」

「へええ。これ、そんなにうまいのかね。そうかね。百合子がよくそんなことを知ってたなあ」

二人して朝早くから酒が飲める嬉しさに、二人は子供のようなバカくさい話のやりとりをして、私にお愛想を言う。竹内さんは、甲板を散歩していると、この室の窓だけ灯がついていたので、武田が起きているなどすぐわかった。だからやってきたのだ。と言った。たまに窓をよぎる人影は、船員らしい人ばかりだ。本を抱えて静かに歩いている。乗客はまだ眠っている。

七時過ぎ、竹内さんは帰った。

八時、朝食

○サラミ三、四片

○半熟卵二個

○パン、バター

○紅茶

○トマトジュース

隣のテーブルの西洋人の男の子は、私が食堂に入って行くと指さして「チヨ子さん、チヨ子さん」と言う。「チヨ子さん、カヨ子さん」とも言う。母親が半熟卵を食べさせると、一口のみこむたびに「オイシイ」「モノスゴクオイシイ」と、わざとらしく言う。

十時半ごろ、映画あり。主人だけ行く。私は売店で買った絵葉書を書く。机の前でぼんやりしていると、竹内さんの真横向きの姿が窓を通り過ぎるなり。少し経つと、また竹内さんの、今度は反対側の真横向きの姿が通り過ぎる。竹内さんは映画は観たくないらしい。映画はバレエ映画で、古くてフィルムがときどき切れたそうである。

昼食。

西洋人の男の子が、坂野夫人の席に坐って動かない。「ママが心配してるよ」と席を立つようにうながしても「ボクは四つでママは心配していない。四つで大きい」と頑張っている。女給仕が戸棚から小さなりんど（日本では国光りんごといっている、その一番小さいカスのようななりんどだった）を大切そうに持ち出してきてあやすが、眼もくれず動かない。彼女は抱き上げて隣のテーブルへ移した。

昼食は、昨日の夕食のときに、めいめいが注文した献立でくる。正確に次々と運ばれてくる。私の注文した昼食

○野菜サラダ

○パン

次にきたもの

○純日本式味噌汁（中身は麩とねぎ）

○丸干いわしの焼いたの三本と昆布と魚の酢じめ

○米飯小井一杯（塩味がついている）

その次にきたもの

○白身魚のバター焼、野菜つけ合せ

最後にきたもの

○クリームコーヒー

主人の注文献立は、前菜に鰯の油漬がくる。これがとてもおいしかったとか。

今日は食卓に日本の割箸がでた。

帰りに酒場に寄る。酒場は、夜は七時から十二時まで。

モスコスキー二杯、ビール二本（今日はキンピールの小びん）百六十円、煙草（マルボロ）百四十五円、ぶどう酒一本。

そのあと、ボルゴグラードとかいうところへ行く日本人団体の席の人にすめられ、私はぶどう酒五杯飲んだ。この人たちはおせんべいと海苔の佃煮を出して飲んでいた。この中に一人だけ混っている女の人は、コペンハーゲンの旦那さんのところへ行くのだといった。

戻ると主人はシャワーを浴びて昼寝。竹内さんは、そのまま室にいて私と話しながらぶどう酒